

たけの信仰を支えてきた要因であると思われる。

山は樹木があるから尊い

さて『実語教』は「山高キガ故ニ貴カラズ」に続けて「樹有ルヲ似テ貴シトナス」とある。つまり「山は樹木が生い茂っているから尊いのである」と述べ、山の実質にまで言及している。この語句は武州みたけの信仰にも、そのままあてはまるであろう。



武州みたけの信仰は、いわゆる山岳信仰の一形態である。山上に鎮座する武蔵御嶽神社は、社伝によれば、崇神天皇七年の創建であるという。社名

にとくに「武蔵」という語を添えるのは当社が武蔵の国号と深い関わりをもつからであろう。すなわち奥宮の祭神である日本武尊は「みたけ山」の山頂に武具を蔵めたと伝え、これが「武蔵」の国名の起源であると伝えられている。

武州みたけは、現在は神社神道の山となつてはいるが、中世では修験道の山であった。はやく聖武天皇の天平八年（七三六）に、僧行基（六六八〜七四九）は、この山に修験道の主神である蔵王権現を勧請したといい、中世には、「御嶽蔵王権現」または「武州金峯山」などと呼ばれ、関東における蔵王権現信仰のメッカであった。そして近世に入ると、前号でもふれたように御師が活躍し、各地に御嶽講が組織され、御嶽山の御札が広く配られた。

このように武州みたけの信仰は、悠久の歴史のなかで、さまざまな宗教と習合し、多様に展開してきた。したがって、この山の信仰を一言で説明するのは難しいが、たつて葛城山の一言主の神にお願いすれば、恐らく「樹有ルヲ以テ貴シトナス」との

回答を得るのではないかと思う。つまり武州みたけの信仰を支えてきた大きな要因の一つは、そこに樹木が生い茂っているからであり、これは古代から現代にいたるまで変わらなかつたことであり、また将来も変わらないものと思われる。

まとめ

山はただ単に高いから貴いのでなく、そこに樹木が生い茂っているが故に貴いというがわかる。樹木は武州みたけの命であり、この山に対する信仰を支え、また効果的にしてきた必要不可欠な要因である。

前号に掲載の「神社の杜」に、御嶽神社の杜は、人間だけでなく、野性の鳥獣たちにとつても大切な森であることを説いている。まことにその通りで、武州みたけの森林は、雨を蓄え、人々の生活に欠くことのできない水をはぐくむ水源なのである。

このような森林を護持していくことは、並大抵の苦勞ではないが、それは「みたけ山」に対する信仰の証しにほかならない。

御嶽神社宝物シリーズ1

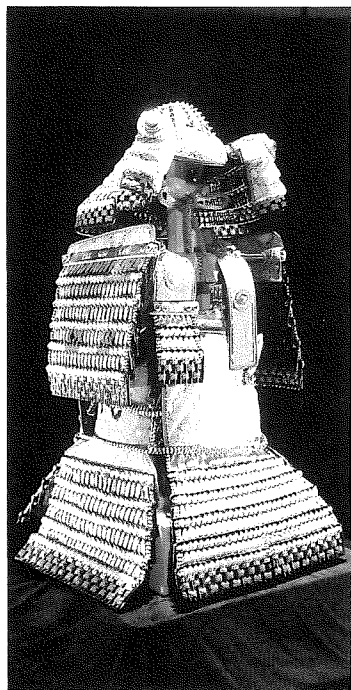
国宝・赤系威大鎧

日本風俗史学会会員
青梅市文化財保護審議会委員

齋藤 慎一

赤系威大鎧は、武蔵御嶽神社に古くから伝わり、江戸時代には將軍徳川吉宗も再度上覧したという、平安時代後期の名甲である。

平安後期、武士が政権を掌握しつつある時代、その重武装騎射軍団の統領の着用した甲冑としての威武と機能と王朝的意匠をよく造形すると共に、制作手法の定式化の初期段階を示す重要な遺例である。が、武具の重厚さによく消化力強くひきしまつた輪郭の



この赤系威大鎧と前後する平安時代の威大鎧として、厳島神社蔵の小桜威大鎧(国宝)・菅田天神蔵の小桜黄返大鎧(国宝)・赤木家蔵の赤韋威大鎧(重要文化財)・猿投神社蔵の檜島系威大鎧(重要文化財)などがある。

しかし、基本部分の完存と意匠の洗練、定形式の構造の創始、素材の豪華さという条件を充足させる平安時代後期以前の大鎧は、この武蔵御嶽神社の赤系威大鎧において他にはない。

さて、構造・手法・意匠の細部を観察しよう。

まず基本的には、4mm程度の厚さで、下辺の幅が36mmから38mm程の牛革の小札と鍛造された鉄小札から成り立つ。小札の長さは、兜の鞞部分で約62mm、大袖・梅檀板・胴・草摺部分で約77mmある。その幅を比較すると厳島神社の小桜大鎧が42mm(鞞)か